
法政大学

新しい英語教育の試みとその苦難

岩月 正見

2007年9月執筆

私の所属する法政大学工学部システムデザイン学科(以下、SD 学科)は、2004年4月に工学部の第9番目の学科として新設されたばかりの学科です。新設学科ということもあり、既存学科ではなかなかできなかった新しい試みを行うことができました。

特に、英語教育については、従来の2ヶ国語を必修とする外国語のカリキュラムを廃し、英語のみ12単位を必修として、そのうちの8単位を「英語スキル」という科目に当て、TOEFL - ITP による客観的な評価により単位認定を行っています。この科目は、週2日2時限ずつを、日本人とネイティブの講師2人で担当し、入学時と学期末に行われる TOEFL - ITP スコアにより受講クラスを到達度別に分けて、より実践的な英語教育を目指しています。単位認定も、TOEFL470点相当のレベルに達していれば、入学時点においてさえも最大16単位まで認めています。このうち、選択科目となる最上位レベルの英語スキルでは、米国の大学院留学資格の目安となる TOEFL550点以上を目指すクラスも開講しています。英語力がこのレベルまで到達し、さらに、カリフォルニア州立大学イーストベイ校との提携により実現したMBA科目の先取りカリキュラムを受講して単位が認められれば、本学の単位としてだけでなく、同校のMBA科目としても同時に認定され、最短1年の留学でMBA取得が可能になります。これらの先取り科目は、同校講師によるインターネットを介したオン・デマンド授業や米国とリアルタイム接続によるインタラクティブな授業の組み合わせにより実現しています。

このように、英語がとても得意な若干名の学生にとっては、最新で高度なサービスを楽しんで、バラ色の学生生活を送ることができます。しかしながら、SD 学科の入試では、英語を選択しないで受験することもできるため、もともと英語が苦手な学生が少なからずいるのも現実です。英語が得意でない大半の学生たちは、非常に厳しく不安な学期末を迎えることとなります。SD 学科の学生が4年生に進級するためには、英語必修科目12単位をすべて取得していなければなりません。すなわち、3年生修了までに TOEFL470点以上のレベルに達している必要があります。このため、単に正規の講義を開講して学生が及第点を取るのを待っているだけでは、大量の留年生を出してしまうことは火を見るより明らかです。

そこで我々は、まず学科設立時に、自主学習用の英語教材を提供できないかと探していたところ、定評のあるアルク社の ALC NetAcademy をすぐに見つけ、価格が見合うものであるならば、ぜひ導入しようと、アルク社のスタッフの方にお話を伺いました。ご存知の通り、ALC NetAcademy は Web 型の教材なので、サーバライセンスを一度取得してしまえば、学生ひとりあたりの単価は非常に安くなるため、導入を即断しました。もちろん、その中身であるコンテンツが充実しており、学生が興味を持続しながら取り組めると判断したことが、選択の一番の要因です。当初、このサービスは、SD 学科の学生だけに提供していたのですが、工学部と、今年度新設されたデザイン工学部の学生に対してもぜひ学習させたいという要望が強く、情報教育システムのリプレイスに伴い、今年度から新しいバージョンの ALC NetAcademy2 も新規に追加導入し、対象学生を2つの学部にも拡大しました。導入後のアクセス数を調査したところ、4月から6月までの一月当たりの平均アクセス数は、およそ4200件で、月を追うごとに、レベルの高いコースに移っていることが伺えます。また、学生向けに説明会を10回ほど行ったところ、工学部と同じ小金井キャンパスに置かれている情報科学部の教員と多くの学生から、ぜひ我々の学部でも使わせてほしいという強い要望が出されました。そこで、ソフトウェアのライセンスとしては大学単位で無制限に利用できることから、サーバのハードウェア性能も現状では問題ないと判断し、情報科学部の学生にも開放しました。このように、サーバ性能が十分で、学部間の垣根を越えることができれば、大規模な大学ほど、安価にサービスを提供できます。

SD 学科では、昨年度、第1期生が3年生となり、先ほどお話しした英語の進級基準をクリアしなければ留年してしまう時期を迎えることになりました。このままだと留年する恐れのある学生の保証人の方々には、手紙

でその旨をお伝えし、叱咤激励していただくようお願いしました。学生がやる気になってくれるならば、何通でも手紙を書くのですが、当然ながら、これだけで全員の TOEFL スコアをアップさせることはできません。そこで、外部あるいは学内の TOEIC あるいは TOEIC-IP 試験のスコアでも、TOEFL 換算で 470 点をクリアしていて、授業にきちんと出席していれば、単位を認めることにしました。さらに、これでも救われない学生に対しては、年 2 回の学期試験終了後に、アルク社の提供する TOEIC 講座を有料で開講し、講座内で行われる TOEIC-IP 試験で何とかクリアしてもらおうと考えました。この講座は学科からその費用を一部負担しているので、一般価格に比べれば破格の値段で受講することができます。この講座は正規の授業ではなく、有料なので、受講を強制することはできませんから、希望者のみを募ったのですが、受験資格をもつ学生が全員参加したことは言うまでもありません。夏休みと春休みをつぶして、月曜日から金曜日まで、2 週間朝から夕方までみっちり受講し、予習復習もこなさなければならない講座ですから、呑気な大学生にとっては大変な毎日だったと思います。しかし、留年がかかっているため、モチベーションが異常に高く、出席率は、全員ほぼ 100% 近い状況でした。おかげで、ほとんどの学生のスコアがアップしただけでなく、昨年度末には、受講したほとんどの学生に対して、何とか及第点をあげることができました。また、学生からも好評で、これまで経験したことのない充実した勉強ができたとの意見も少なからず聞きました。

以上、SD 学科の英語教育についてご紹介させていただきました。今年度から SD 学科は、建築学科と都市環境デザイン工学科とともに工学部から離れ、デザイン工学部の 1 学科として市ヶ谷キャンパスにて新たにスタートしました。したがって、新 1 年生からは、3 学科共通の新しい英語教育を提供しています。そこでは、これまでの経験を踏まえて、工学部 SD 学科のハイリスク・ハイリターン英語教育を見直し、外部試験のスコアによる単位認定も認めつつ、従来型の運用方法と併用することで、学生のモチベーションを下げずに、できるだけローリスク・ハイリターンの教育を提供できるよう工夫しています。いずれにしても、今後、大学における実践的な英語教育の需要はますます高まっていくことは明らかですから、アルク社の今後の動向にますます注目し、さらなる展開を期待したいと考えています。